



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	平安時代における可能・不可能の不均衡の問題をめぐって Why were there so few potential verb forms in the Heian Period?
Author(s)	吉井 健 (YOSHII Ken)
<i>Citation</i>	文林 (BUNRIN), No.36 : 47-67
Issue Date	2002
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

平安時代における可能・不可能の不均衡の問題をめぐって

吉 井 健

一 はじめに

平安時代の可能表現においては、否定形（不可能表現）の例がほとんどであり、肯定形の可能自体の例はきわめて少ないことが知られている。¹表題の「不均衡」とは、このような状況を指したものである。手近なものと見ると、山田孝雄（一九一三）は、状態性間接作用の複語尾、すなわちル・ラルについて、

恋しかるらむ事の堪へがたく湯水ものまれず、おなじ心になげかしかりけり。（竹取）

といった例を挙げて、「能力をあらわすもの。この際には打消の形のみ見ゆ」としている。松村明（一九六九）では、中古の実例では、可能の「る」「らる」は、否定表現または反語表現の場合に、ほぼ限られている。肯定表現の場合は特別な語を用いず、文脈にゆだねるのがふつうであるところから「打消の形のみ見ゆ」（山田孝雄『平安朝文法史』（一九一三））といわれているが、否定や反語表現にならないものも例外的に存在する。（67頁 西田

直敏執筆

と、山田（一九一三）を若干修正している。最近では、渋谷勝己（一九八三）が、「可能表現における肯否の非対称性」として、次のようなものを挙げている（235頁）。

I 文献に見られる非対称性

(i) 文献における用例数の偏り：文献に見られる可能表現の用例数は、否定（反語）表現のほうが多い（相対的相違）。

(ii) 文献における用例の欠如：ある可能の否定形式に対応する肯定形式がない場合がある（絶対的相違）。

II 方言における非対称性

(iii) 現代諸方言における使用頻度の偏り：対応する形式では否定表現の使用頻度のほうが肯定表現のそれよりも多い。

(iv) 可能の意味分節に見られる非対称性：能力可能・外的条件可能を形式的に区別はするが、それは否定表現に限られる。

III 言語変化における非対称性

(v) 変化の開始：可能表現の変化は否定表現から始まる。

(vi) 変化の終了：可能形式が衰退する場合には、その使用は否定表現に限定されていく。

(vii) 地理的伝播の違い：可能表現形式の伝播は否定形式のほうが早い。

IV その他

(Ⅷ) 調査のしやすさ：否定表現のほうが優る。

そうして、こうした非対称性が生じる理由として、次のように述べている（要約）。

可能文の補文の命題内容は、動作主体にとってその動作の実現が望ましい（厳密には、動作主体にとって望ましいと話し手が推量する）ことがらを表すものでなければならない、という制約がある。

動作主性高い動詞述語文の肯定表現・否定表現、それに可能文の肯定表現については、動作主体の期待する動作が、実現する動作と一致する。一方可能文の否定表現については、動作主体の期待する動作と実際に実現する動作が一致しない。

可能肯定表現より可能否定表現のほうが輪郭の明澄な（他の意味領域と対立が明らか）意味領域である。こうした可能否定表現の認知的な突出性（saliency）が、肯否の非対称性をもたらしている。

この整理は、文献上のみならず、さまざまな面において不可能表現の方が優勢であることを教えてくれる。ただし、同じ非対称性といっても、平安時代の文献の場合のように、可能表現がほとんど見られないという著しい不均衡は、ここに挙げられたⅡ・Ⅲ・Ⅳとはやや次元を異にするように思われる。また、可能否定表現の認知的な突出性を認めるとしても、それがすぐに平安時代の極端な不均衡（非対称性）を説明するものとは言えないだろう。本稿では、こうした文献上の不均衡の問題について、平安時代の例をもとに考えてみたい。

二一 自発と可能

さて、可能・不可能の問題を考える際に、可能とはどのようなものであるかということを見定めておきたい。その際、可能を自発と比較することが有効である。中西宇一（一九九六）は、

可能は「思い出そうとすれば、思い出すことができる」という、まずその意志の発動を前提として考えられるものである。それは自発が意志の発動なしにひとりで生じてくるものであったのに対応する。（69頁）

と言う。これは、自動詞（非対格自動詞）による「おのづから然る」事態、すなわち自動と、自発との共通性を重視したものであろう。森山卓郎（一九八八）も、

自発の場合、「ハ」によって、全体的な主語は交替しないということが言えそうである。自発ではむしろ、「故郷が思い出される」というように、ガ格（部分主語になるだろう）をも含めての動きが、全体として自動詞的な動詞句とでも言うべきまとまり（述語）になっていて、主語として取り上げられた主体において動きが発生する、というような意味になっていると思われる。（188頁）

と指摘するように、自動と自発とは親近性が高い。このように自発と自動との間に等質性を認めておくことは、重要であると思われる。さらに、森山・渋谷（一九八八）は、

山形市方言における自発の意味とは、基本的に、無意志動詞化 *deagentivization* であるとまとめることができる。（山形市方言では）自発形式は、基本的に、意志動詞ならばどんな動詞でも共起することができる。逆に「切れる」「始まる」などの全くの無意志動詞に共起することはない。

という。ここでは、自動ならぬ自発は、意志動詞について生起する概念であることが述べられている。結果として自動に等価であるにしても、意志的行為についてのみ自発という概念が適用されるという立場が明確にされている。こうした考えを承けつつ、井島正博（一九九一）は、

述定文で表わされる場合は非時間的であるから勿論、現象文で表わされていても、現実が生起する出来事とは一線を画した、潜在世界での潜在的な事態として表わされるのが可能文であると考えられる。（160頁）

としつつ、現代語における「今回はすばらしい小説が書けた」「ア、ちゃんと泳いでいる」といった文も周辺のなものとして可能表現と認め、

〈自発〉は常に実現された事態を表わし、しかも実現するにあたって〈意志性〉を伴わない。その点、実現された事態を必ずしも表わさず、実現する場合には〈意志性〉を伴う〈可能〉とは対照的である。

と述べている。この井島（一九九一）の考えは、自発と可能とは、動詞が表わす動作の実現に意志性が伴うか否かにおいて、まず優先的に区分され、さらに、自発は実現された事態を、可能は潜在的な事態を表わすことを基本とする点に差があるという考えと受け取られる。本稿では、こうした考察を踏まえて自発も可能も意志動詞についての概念として用いる。そうして、井島（一九九一）に従い、動詞が表わす動作の実現に関して、自発は意志を伴わず、可能は意志の発動を前提とするものと考ええる。また、基本的に、自発は実現した事態を表わすのに対して、可能は潜在世界における事態を表わすものと見ることにする。

なお、意志性については少し注意が必要である。自発だけでなく、可能も表現全体としては意志性をもたない。

太郎はこの台を持ち上げられる。

という可能の文があった場合、「持ち上げる」ことは意志の発動を前提にするが、「持ち上げられる」ことは意志によって制御されない。これは、可能表現としての「持ち上げられる」が、「持ち上げられよう」(意志)「持ち上げられろ」(命令)といった表現をもたない点からも確認できる。

太郎はこの台を持ち上げられた。

といった、実現が伴う場合も、「持ち上げられた」事態全体は意志の制御の埒外にある。「持ち上げる」動作に意志が発動されて、その意志とは別に、結果としてその動作が成就したことを表わしていると見るべきである。したがって、太郎はこの台を持ち上げられなかった。

という否定においても、「持ち上げる」動作に意志が発動されることは否定されない。その意志の埒外にある実現の面が否定されるのである。そこに不可能(可能の否定)の意味が生じているのである。本稿で「意志の発動を前提とする」という場合、動作の面について意志の発動が読み取れることを示している。^{注2}可能表現全体に関わるような意志を考えているのではない。このように、可能は、意志の発動を前提とするが動作の実現は動作主体のアクチュアルな意志の埒外にある、といった意味構造をもっている。

これらのことを確認しておいて、次に平安時代の可能表現の例を検討する。

二― ラル形式の可能表現

平安時代において、動詞に助動詞ル・ラルが下接した形式（以下ラル形式とよぶ）は、不可能を表す例に偏るが、例外的に可能を表す例が見られるとされている。そこで本節では、源氏物語を対象に、そうした少数の可能を表わすと思われる例を抽出し、それらの例に検討を加えてみることにする。

①日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。いといたく荒れて、人目もなくはるばると見わたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。（夕顔①235）

②はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなどいろいろ見わたさるるに、（椎本⑤164）

③かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、蔀などもなし。簾かけ、幕などひきたり。南ははるかに野の方見やらる。（更級日記）

④馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例、さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立てちがひたるあはひより見通されて、あらはなり。（蜻蛉⑥237）

⑤東の妻戸押しあげたれば、むかひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。（末摘花①377）

⑥少したちいでつつ見わたしたまへば、高きところにて、ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる。（若紫①274）

これらは、「見る」に関する複合語（派生語）のラル形式である。可能を表わすと思われる例を探すとまず網にかかっ

てくるものである。源氏物語においては、①②の「見わたす」にはこのほかに五例、⑤の「見入る」にはこのほか三例の類例がある。これらは自発とも見られるが、可能の解釈も受け入れる。これは、「見る」という感覚の動詞の特徴によるところが大きいと思われる。「見る」という行為は、常にヒト（有意志主体）を主体とし、所与の対象に感覚を向けるという点においては、すぐれて意志の制御がきく行為である。しかし、いっぽうで感覚であることからして、対象を新たに捉えるという面をもつ。この場合、予め対象は措定されていないのであって、動きの成立は、対象の側から規定されるという一種の受動性をもつことになる。つまり、「見る」という行為の成立には、意志的に対象を捉えるという面と、対象からもたらされるような面とがありうる。「見る」が（下に他の動詞を下接させて）ラル形式をとる場合、この受動性が卓越してくる。全体としては「見ゆ」に近づく。例えば、現代語において、

私には霊が見える。

といった場合、対象が現に見えているという理解がある。これは対象からもたらされた面での実現をいうものである。これは自発と見てよい。意志の発動は背景化している。いっぽう、「見ようと思えば見ることができる」という理解がある。これは可能としての理解（私は霊を見ることができ）である。この理解においても、対象は「私」個人の感覚を超えて予め保証されていなければならない。しかし、意志の発動はより積極的なものと見られ、逆に実現の面は不問にされている。感覚の場合、目を向けることや、耳をすますことは意志の制御が完全にできて、総体としての動きの実現は、濃淡の差はあっても、対象によってもたらされるものであり、意志によって制御しきれないものであると考えられる。このような意志の発動の面と実現の面との分析的なあり方は、前節の最後に見たような可能表現

の意味構造にきわめて親近性が高いと認められる。こうした意味構造の親近性ゆえに、「見る」の関連語には可能と見うる例が目立つのだと考えられる。

もっとも、こうした可能としての理解は視覚以外の感覚では必ずしも優勢でない。

⑦鶯のうららかなる音に、鳥の樂華やかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなく囀りわたるに、(胡蝶③165)のように、「聞きたる」のような例では、可能の読みは相対的に採りにくい。聴覚においては、対象の存在への依存性(受動性)がより高く、所与の対象を聞こうとする意志の積極性において視覚に劣るためであろう。①～⑥についても、意志的に対象を見するという面が見出せなくなるに従って、自発に近づくと考えられる。

また、①～⑥は、事実上、現に実現している事態を表わしていると見られる点も注意しなければならない。可能は基本的には潜在世界における事態の成立を表わすものであったとすると、これらは、全体的に自発に近い位置にあると見られる。ただし、意志の発動を重く見れば自発と一線を画することになる。

⑧参りつどふ人のありさまども、見くださるるかたなり。前より行く水をば、初瀬川と言ふなりけり。(玉鬘③110)
⑨前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊にいでたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆうきよなること、所からはましてこの世のものと見えたまはず。(須磨②192)

これらの例も、視覚に関するものである。基本的には、①～⑥と同じことが言えるが、可能の読みが、いくらかしやすくなっている。おそらく、ラル形式が、連体修飾節に用いられていることがその理由であると思われる。こうした連体修飾節内に入った場合、当該の行為の実現の如何は個別性をもったものとして問われなくなる。したがって、積

極的に自発と解するような条件がなくなるわけである。この場合、アクチュアルな意志に代わって、より一般的な意志の発動が前提となつて、性状規定的に解釈されうる。その結果、「見下ろせる所」「海を見ることのできる廊」といった解釈が成立しやすい。

さて、こうした「見る」関係の動詞のほかにも、可能の読みができる例が若干ある。

⑩いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌などの、この世に見えぬ心地して、めづらしう見たてまつりたまふには、いとど御心地の悩ましさも取り棄てらるる心地して起きるたまへり。(行幸③289)

⑪「年月のつもりをも、まぎれなくかぞへらるる心ならひに、かくおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」と恨みきこえたまふ。(若菜上④73)

⑩は、大宮を見舞った源氏の容貌を見て、大宮が病床から起き上がる様子を描いた例、⑪は、ひそかに二条宮に朧月夜をたずねた源氏が、戸惑う朧月夜を責める言葉の例である。これらも、可能の読みができるだろう。二例とも、連体修飾節の例であつて、やはり、当該の行為の実現の如何は個別性をもったものとして問われず、それに伴つてアクチュアルな意志の発動も問われないようになっていゝことが、こうした理解を支えていると考えられる。被修飾語が「心地」「心ならひ」といった語であることもいくぶん寄与しているかもしれない。意志主体たる当人の、気持の上でのことであることが明示的であるからである。もちろん、これらの場合も、意志の介在を考えなければ、自発と解釈されることになる。

また、次のような例も拾える。

⑫ かけまくはかしけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襷かな

昔を今に、と思ひたまふるもかひなく、とりかへされむもののやうに。と、なれなれしげに、唐のあき緑の紙に、
櫛に木綿つけなど、神々しうしなしてまゐらせたまふ。(賢木②111)

⑬ おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなし、(柏木④286)

これらも連体修飾節の例である。⑫は、源氏が朝顔の斎院に歌を詠みかけ、往時をしのぶ場面、⑬は、朱雀院の心語で、女三の宮の後見として源氏を頼りにできそうな様子であると考えている場面である。これらも⑧～⑪と同様に見てよいと思う。殊に⑫のように「もの」につづく連体修飾節の場合、アクチュアルな意志よりも一般的な意志性が認められやすく、性状規定的なものとして可能の解釈を受け入れやすい。ただし、これらの例ではル・ラルに「ム・ベシ」が下接している。こうした助動詞のはたらきについては、別に考えなければならぬが、当面、現実における実現の意味を排除することに寄与しており、可能としての理解を支えているものと見ておきたい。

さて、もう一種、少し事情の異なる例がある。

⑭ 数ならば身に知られまし世の憂さを人のためにも滞らす袖かな(夕霧④473)

これは、反実的な仮定の帰結にあらわれた例である。ここでは、反実仮想であることによって、アクチュアルな意志の発動の如何が不問になる。そうして、あくまで仮定の世界での実現が想定される。当該の行為が求めてすべき行為であるなら、ある条件が整えば当該の行為が(意志的に)行われるということが述べられていることになり、結果と

して、可能の意味構造ときわめて近しいものになる。そのためこうした例では可能の解釈を受け入れやすい。

⑮ 流れいづる方だに見えぬ涙川おきひむときやそこは知られむ（古今集 四六六）
も同様に考えられる。

以上のように、可能の意味を読み取れるラル形式の例は、（Ⅰ）「見る」に関する複合語（派生語）に付いた場合、（Ⅱ）意志動詞が連体修飾節内に用いられた場合、（Ⅲ）反実仮想の帰結に用いられた場合、といったものに偏っていることがわかる。（Ⅰ）は、感覚、特に視覚という感覚の意味構造に依存したものである。（Ⅱ）は、アクチュアルな実現や意志の発動が不問にされるような構文環境の支えによって解釈されたものである。（Ⅲ）は、仮定の中での実現のみが問題とされる構文環境で、やはりアクチュアルな実現や意志の発動が不問にされることによって可能の意味を担っているものである。いずれの場合も、上接動詞の意味構造や構文環境から可能の理解ができるものだとと言える。総体的に自発との差はきわめて微妙であり、積極的に自発と言えない隙間に認定されているといった感がある。このように見るならば、（不可能ならぬ）可能という意味が、本来にル・ラルによって表わされているとは言えるのか、疑問が生じてくる。こうした問題をさらに別の面から考えるため、節をあらためて、無標の動詞によって可能の意味が了解されるような場合を見てみたい。

二―三 無標の動詞による可能

動詞が、ラル形式などをとらず無標の形式のままで、可能（不可能）の解釈を受け入れる場合がある。こうした例

の存在は、早く三矢重松（一九二六）で「生得被能動詞」として注意され、佐伯梅友（一九五八）では、「結果的表現」として取り上げられている。ここでは、否定の場合を除いた上で、そうした例を少し整理を施して示す。

A①思ふゑに逢ふ（安布）ものならばしましくも妹が目離れて我れ居らめやも（万葉集 ⑮三七三二）

②吹く風にあつらへつくるものならばこの一本はよきよと言はまし（古今集 九九）

③恋ひしきに命をかふるものならば死にはやすくぞあるべかりける（古今集 五一七）

④月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む（古今集 六〇二）

⑤取り止むる物にしあらねば年月をあはれあな憂と過ぐしつるかな（古今集 八九七）

⑥飛鳥川塞きてとどむる物ならば淵瀬になると何か言はせん（後撰集 七五二）

これらは、意志動詞が「～ものならば」に対する連体修飾節に用いられた例である。「意志動詞+ものならば」は、「意志動詞が述語となっている事態が一般に実現するならば」、ということであろうが、きわめて可能の読みを受け入れやすい。意志の発動を前提としながら、個別的な実現やアクチュアルな意志から離れたものになっている点で、潜在的な世界での実現を意味することになるからだと考えられる。

また、例えば⑥は「塞きてとどまる物ならば」のような自動詞の表現と意味するところが近く感じられる。これらの例においては、他動詞が個別的な意志を喪失し、動作過程よりは対象の変化といった動作の実現（元遂）の局面に焦点が当たっているためであろう。これは、これらの動詞がアクチュアルな意志性をもたなくなっていることも相関しているよう。こうしたことが全体として可能と解釈されやすい条件になっているのだと考えられる。ついではながら、

B ①君に恋ひい寝ぬ(寝不宿) 朝明に誰が乗れる馬の足音ぞ我に聞かする(万葉集 ①二六五四)

②天の川瀬を速みかもぬばたまの夜は更けにつつ逢はぬ(不合) 彦星(万葉集 ①二〇七六)

③老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まほしき君かな(古今集 九〇〇)

のように、動作過程を取り出しにくい意志動詞の否定が、不可能に解されやすいのも、ここに思い合わされる。それはともかく、「もの」にかかるもの以外でも、

A ⑦瀬を塞げば淵となりても淀みけり別れを止むるしがらみぞなき(古今集 八三二)

のようなものは、可能の解釈も受け入れる。

また、

C ①あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ(紫式部日記 二〇三)

②思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも(伊勢物語 三段)

③人言の繁き時には我妹子し衣にありせば下に着まし(服)を(万葉集 ①二八五二)

④天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛び帰る(等比可弊流)もの(万葉集 ⑤八七六)

などのように、仮定条件の帰結に用いられた意志動詞が可能の解釈を受け入れることがある。④は条件表現ではないが、意味関係としては、同列に置ける。ラル形式についても見たように、こういった例では、実現そのものが仮定された世界のものになり、アクチュアルな主体の意志の埒外のものになっている。そのために可能の解釈を受け入れやすいのだと考えられる。

このように、可能を表わすと見うるラル形式が現れた条件と同じような条件のもとで、無標の意志動詞も可能の解釈を受け入れることが認められる。ラル形式が可能を表わす場合、ある一定の構文的な環境に限定されていた。そうした構文環境が与えられた場合、無標の動詞についても可能の意味を見出すことができるのである。もちろん、ここに挙げた例のすべてを可能と解釈しなければならぬというわけではない。しかし、可能の意味を含意しうる例が存在することは認められよう。そうすると、可能という意味が読み取られるためには、構文的な環境も相当に関係していると考えられる。そう見るならば、前節のラル形式の場合も、それ自体が可能を表わしているとは即断できないことになる。

しかも、可能を表わすと見られるラル形式は極端に数が少ない。そのことも、ラル形式がそれ自体可能を表わしたのか疑わせるのである。

二一四 不可能と可能

前二節の考察によって、平安時代において、ラル形式自体が可能を表わすといつてよいかという点が問題となってきた。しかし、ラル形式の否定形が不可能を表わす例は数多く見られる。こうした例の存在は、ラル形式が可能を表わすことの証拠ではなからうか。このような例が存在する以上、ラル形式が可能を表わすと考えことは動かしがたないように見える。しかし、不可能表現の存在がすぐには可能表現の存在証明にならないのではないかと考える。以下、そのことを考えてみたい。まず、ラル形式の不可能を表わすと見られる例をいくつか挙げておく。

①御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。(桐壺①99)

②なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。(松風②406)

③酔のすすみては、忍ぶこともつつまれず、ひが事するわざとこそ聞きはべれ。(竹河⑤66)

④あり難くあさましき事どもを見たる人なりければ、かうあやしく衰へたる人とも思し棄てられず、いとなつかしう語らひたまふ。(権本⑤190)

一般に、不可能と可能とは、表わす意味の重点において、やや異なった性格をもつように思われる。可能表現は基本的に潜在的な可能性 (potentiality) を表わすのであるが、不可能表現と言われているものは、むしろ、希望しても (意志を発動しても) 事態が実現しない現状を説明するような表現になる。④「思し棄てられず」という文は、思し棄てていない現実を心情や状況から説明している。いっぽう、「思し棄てらる」が可能の意味をもつという場合、それは思し棄てていない現実があるが、その気になればいつか (いつでも) 思し棄てることが実現するということを表している。言い方を変えれば、不可能表現は現実が不可避な選択肢であることを述べるのに対して、可能表現は現実以外の選択肢が開かれていることを述べていると言える。ここにおのずから現実への関心の濃淡が見られるはずである。不可能表現の方が、可能表現よりも現実のあり方への関心が強いと考えられるのである。これを、表に示す。

	例	現 実	主 張
可 能	思し棄てらる	思し棄てていない	いつか(いつでも)思し棄てる
不 可能	思し棄てられず	思し棄てていない	思し棄てる状況ではない 気にならない

すなわち、不可能表現の場合、当該の行為が実現していない現実から出ることがない。それは、可能が現実から離れた可能性を表わすのとは異なっている。つまり、ラル形式の否定では、可能性の否定と実現の否定（＝行為が行われていない現実）とが截然と分けられない形で結びついている。

したがってまた、不可能表現と自発の否定表現とも、微妙な関係にある。ともに否定となったとき、動作の実現という面がなくなるため、この面での両者の差はなくなる。当該の行為が実現していない現実とは、両者に共通のものである。そうすると理論的には意志の発動が見うるか否かで区分されることになる。しかしながら、この区別は事実上はかなり微妙である。例えば、先掲①「つゆまどろまれず」の場合、意志が発動しているのか否かは決めがたい。しかも、一般に、意志動詞であるのだから、実現が否定されている場合、肯定の場合に比べて、意志の発動が分析され、前景化しやすいということも考えられる。そう考えるならば、否定表現の場合、総体的に「不可能」と解釈されやすいということになる。

現代語であれば、「思えない」「思われない」といった形式でもって、両者を表わし分ける手段が存在する（実際明

確に分けられるかは疑問だが)。しかも、自発は一人称者の思惟・認識・感情といった場合にしか現れない。しかし、平安時代の和文において、自発と可能を表わし分ける形式はなく、自発は物理的動作を表わす動詞にも広く現れる。したがって、極端な言い方をすれば、自発の否定であっても、不可能に見えてしまうような傾向があると考えられるのである。

このように、ラル形式の否定に不可能と見られるものがあっても、それが潜在的な可能性 (potentiality) の否定であるとは必ずしも言えないのである。これは逆に言えば、ラル形式の否定に不可能と見られるものがあっても、ラル形式の肯定形が可能 (potentiality) の表現として存在することの保証にはならないということになるだろう。

三 まとめと今後の課題

以上の考察から、ラル形式は、平安時代（少なくとも十一世紀まで）において、それ自体として可能の意味を担っていないと考えざるをえない。可能と見られる例が非常に稀であるのは、その素直な反映であると思われる。例外的に見られる可能の例は、「見る」の意味構造や、構文的な環境に支えられて生まれたものであった。必ずしも、ラル形式の存在が決定的な要素ではない。なぜなら、ラル形式をもたない意志動詞でも、同じような構文環境に用いられると、可能の読みができる場合が存在するからである。ラル形式の否定において不可能と見られる例が多数あるが、これも、専ら可能 (potentiality) の否定を表わすものではなく、自発の否定と区分しがたい。したがって、こうした例の存在も、ラル形式が可能を表わすことの保証にはなりえないのである。

それでは、この時代、ラル形式はどのようなはたらきをしていたのかという点が改めて問われよう。これについては、ラル形式の受身・尊敬といった用法との関連も同時に考えなければならず、今それについて十分に論ずる用意はない。ただ、本稿の考察の範囲から考えるならば、ラル形式は、動作の実現がアクチュアルな意志の制御の外にあることを表わす条件の一つとしてあり、それが構文的な条件と相俟って可能と解釈されるのだと考えられるように思う。そうして、本稿のような立場からは、ラル形式が可能を表わすようになるのは、いつ頃からなのかということも問題になる。院政期以降の動向を追う必要がある。さらに、より大きな問題としては、可能の表現と推量の表現の相関も課題として考えられよう。山口堯二（一九九一）によれば、推量の助動詞には、古典語では「ム・ラム・ケム」と時制的な分担体制が見られる。これは現実への密着度が高いもので、中世を過渡期として、近現代語では、ダロウという、推量のムードを分析的に示す形式が生まれたという。これは、可能性の表現が、現実の表現から分離独立したと見ることもできるだろう。可能表現の成立は、こうした推量表現のあり方と何らかの関係があるのではないかと思う。すなわち、可能表現の成立ないしは分析化には、推量の表現の分析化が背景として関係しているのではなかろうか。また、申鉉竣（二〇〇一）では、江戸語における可能動詞は他の可能表現と同様、否定主導のもとで成長し、意味的に見ても「状況可能」中心であったこと、化政期から幕末にかけて「肯定形」にも進出していった可能動詞は「能力可能」へとその意味を拡張してゆくことが跡づけられている。もう少し遡って、院政期あたりから典型的な能力可能（不可能）がどの程度見られるか（見られないか）いま一度検証して見る必要がある。これらは、すべて今後の課題としたい。

注

1 仮名文においては、以下に指摘のあるル・ラルのほかに、①副詞エが専ら否定に呼応し、不可能表現となっていること、②補助動詞として用いられる「〜アヘズ・〜ヤラズ」などが、否定に偏り、不可能表現となり得ていること、③同じく補助動詞「〜カヌ」が不可能表現として用いられていることを付け足すことができる。

2、意志の発動を見るか否かは、動詞の自己制御性のほか、その動詞が述語となっている事態が動作主体にとって望ましいかどうかといった要因が関係する。

3、このほか一例「なほえこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きゐられなどしはべるが、げに限りありけるにこそ、とおぼゆるも、うとまじう心憂くて。(椎本⑤[88])」という例がある。これは中の君の言葉の例で、父八の宮の死後、力を落した状況での言である。「起きゐられなどしはべる」というのは、「見る」関連でもなく、連体修飾節内の例でもなく、反実仮想でもない。しかしながら、「起き上がっていられる」といった可能の意味を読み取れる。ただし、「かう」という副詞があるように、現実を実現している様子を述べている点には注意すべきである。「起きゐる」にどの程度意志性を認めるかにもよるが、少なくとも、すでに実現しているという点において、可能の典型からははずれていると言えるだろう。

旅のいはやなきとこにもねられけり草の枕につゆはおけども (拾遺集⑦物名三五八) も似た例である。

参考文献

- 井島正博 (一九九一) 「可能文の多層的分析」(仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』)
 尾上圭介 (一九九八・九) 「文法を考えるー出来文(一)ー」(3)『月刊言語』
 川村 大 (一九九四) 「ラル形式の機能と用法」(『松村明先生喜寿記念 国語研究』)

佐伯梅友（一九五八）

〔岩波日本古典文学大系『古今和歌集』解説〕

渋谷勝己（一九八三）

〔日本語可能表現の諸相と発展〕『大阪大学文学部紀要』三三卷第一分冊〕

申 鉉竣（二〇〇一）

〔近代語における可能動詞の動向〕『国語と国文学』七八卷（一）号〕

中西宇一（一九九六）

〔自発と可能〕「る」「らる」「ゆ」「らゆ」―『古代語文法論助動詞篇』／初出『女子大國文』八三
号（一九七八）

松村 明（一九六九）

『古典語現代語助詞助動詞詳説』

三矢重松（一九二六）

『高等日本文法』

森山卓郎（一九八八）

『日本語動詞述語文の研究』

森山・渋谷（一九八八）

〔いわゆる自発について―山形市方言を中心に―〕『国語学』一五二集〕

山口堯二（一九九一）

〔推量体系の史的変容〕『国語学』一六五集〕

山田孝雄（一九一三）

『平安朝文法史』

用例出典

万葉集（塙書房版）、古今集・源氏物語（日本古典文学全集（小学館））、後撰集・拾遺集・伊勢物語・紫式部日記・更級日記
（新日本古典文学大系）